



ヒロセ電機株式会社

2020年3月期 第2四半期決算説明会

2019年11月5日

イベント概要

[企業名]	ヒロセ電機株式会社		
[イベント種類]	決算説明会		
[イベント名]	2020年3月期 第2四半期決算説明会		
[決算期]	2019年度 第2四半期		
[日程]	2019年11月5日		
[時間]	10:30 - 11:38 (合計：68分、登壇：38分、質疑応答：30分)		
[開催場所]	100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー6階602		
[会場面積]	309 m ²		
[登壇者]	3名		
	代表取締役社長	石井 和徳 (以下、石井)	
	取締役 管理本部長	福本 広志 (以下、福本)	
	管理本部 IR室長	須崎 英雄 (以下、須崎)	

登壇

須崎：おはようございます。定刻になりましたので、ただ今より、ヒロセ電機、決算説明会を開会させていただきます。

本日はご多忙の中おいでいただきまして、誠にありがとうございます。進行を務めます IR 室、須崎でございます。よろしくお願いいたします。

まず最初に、入り口でお配りしました資料の確認でございます。入り口でファイルでお渡ししています、中身のご確認をお願いいたします。一つ目が、今このスライドに出ていますとおり、決算説明会の資料でございます。それから、その下に中長期成長戦略の進捗についてという、少し薄い A4 横の冊子がございます。それと、その下に先週金曜日、1 日に東証に公表しております、決算短信と業績予想の修正に関するお知らせというものの 4 部構成になります。

それでは、開始させていただきます。本日の進行でございますけれども、最初に私から決算説明を資料に従って申し上げます。そして、その後に業績予想に関しましては、管理本部長の福本より説明を申し上げます。それから、資料が変わりまして、2019 中長期成長戦略の進捗についてを社長の石井より説明申し上げます。残りの時間で、ご質問を受ける予定にしております。閉会は 11 時半の予定になっておりますので、ご協力よろしくお願いいたします。

2019年度
第2四半期 累計
(4月~9月)

受注高 **623.3** 億円
(対前年同期比 -7.8%)

売上高 **602.7** 億円
(対前年同期比 -2.7%)

営業利益 **115.3** 億円 ※利益率 **19.1%**
(対前年同期比 -4.1%)

米中貿易摩擦による景況感の悪化や中国景気減速、自動車販売不振(欧米、中国等)による停滞感を解消しきれず、減収・減益となった。

一般産機

一般産機市場向け売上は、昨年度後半から続いていた減少傾向に歯止めがかかったが、対前年同期比では、-20%となった。

スマートフォン

スマートフォン市場向け売上は、例年通り2Qの中国・韓国向け等需要増が寄与し、対前年同期比 +13% となった。

自動車

自動車市場向け売上は、自動車の販売不振の影響で、既存品の減少傾向が長引いたこともあり、一部新製品の投入もあったが、対前年同期比 +2% となった。

3

最初に、まず3ページになります。第2四半期累計のビジネス概況についてでございます。受注が623.3億円、前年同期比でマイナス7.8%になっております。売上が602.7億円、前年比でマイナス2.7%の減収でございます。営業利益が115.3億円、利益率が19.1%で、前年同期比でマイナス4.1%の減益となっております。

米中貿易摩擦などによる景況感の悪化、特に中国景気減速といったところ、さらに自動車の欧米、中国等による販売不振によりまして停滞感が解消しきれず、減収・減益となりました。

分野別、3分野の動向としましては、一般産機市場向けの売上に関しましては、昨年度後半から減少傾向が続いておりまして、1Qから2Qになって歯止めがかかりましたけれども、前年同期比ではマイナス20%という減収となっております。

スマートフォン向けに関しましては、例年どおり季節性で、第2クォーターの中国・韓国向け等の需要増が寄与しまして、前年比プラス13%の増収となりました。

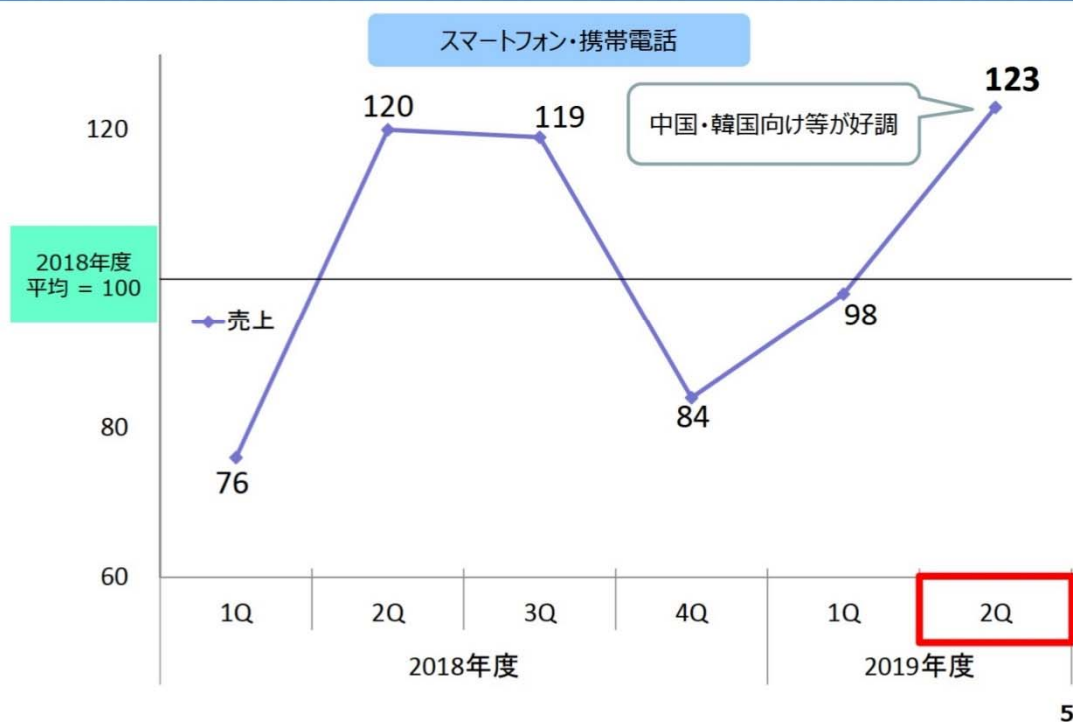
自動車向けは、自動車の販売不振の影響で既存品の減少傾向がございましたけれども、新製品の投入もしておりまして、前年同期比ではプラス2%となっております。

2018年度1Q～2019年度2Q 受注・売上推移 (ヒロセ連結ベース、指数表示)



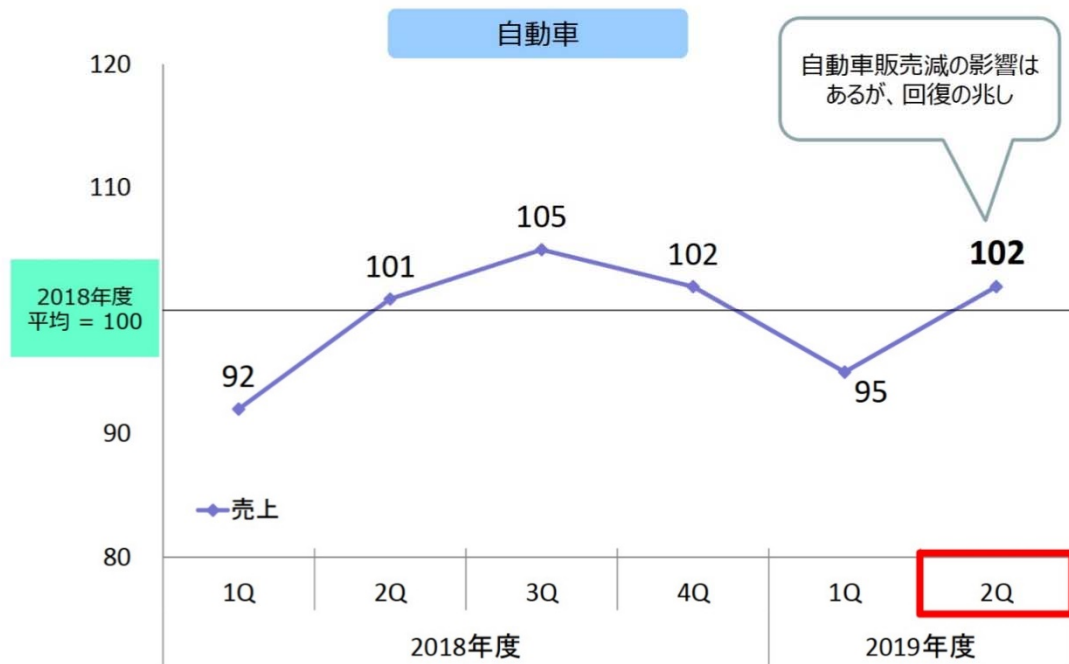
続きまして、グラフでその傾向を見ていただくものをご用意しております。まず、全体の受注と売上でございます。前年平均を100としたグラフでございますけれども、第2クォーターは受注も売上も103という数字になっております。受注は回復傾向が出てきておりまして、売上も底打ちしている状況かと考えております。

2018年度1Q～2019年度2Q 用途別売上推移（ヒロセ連結ベース、指数表示）



スマートフォン向けの売上でございます。中国・韓国等が好調でありまして、指数にしまして、前年平均を100とした指数では123という高い数字となっております。

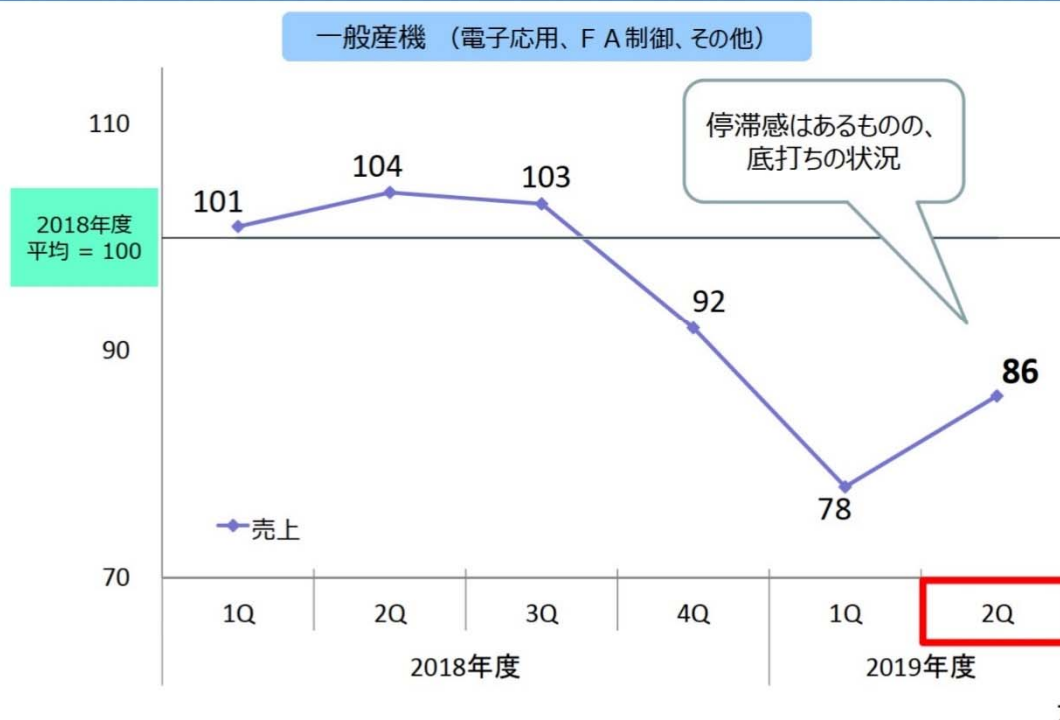
2018年度1Q~2019年度2Q 用途別売上推移 (ヒロセ連結ベース、指数表示)



6

自動車向けです。自動車の販売減の影響で、既存品の販売減の影響があるのですが、自動車トータルとしましては回復の兆しが出ているといった傾向であります。

2018年度1Q～2019年度2Q 用途別売上推移（ヒロセ連結ベース、指数表示）



最後に、一般産機向けであります。まだ停滞感はあるものの、底打ちをしていると数字では見えてきております。産機の回復の遅れに関しては想定以上という認識を持っております。また、今期の見通しに関しましては後ほどのスライドで説明申し上げます。

2019年度 第2四半期 連結決算概要【IFRS】



(金額単位：億円)

	2018年度 上期 (2018/9月期)	2019年度 公表値	2019年度 上期 (2019/9月期)	増減額 (対前年同期比)	増減比 (対前年同期比)
売上高	619.6	620.0	602.7	-17.0	-2.7%
売上原価率	55.6%	55.6%	57.1%	+1.5	
販売・管理費比率	25.0%	25.0%	25.0%	0.0	
営業利益	120.2	110.0	115.3	-4.9	-4.1%
(%)	19.4%	17.7%	19.1%	-0.3	
税引前利益	130.4	115.0	120.9	-9.5	-7.3%
(%)	21.0%	18.5%	20.1%	-0.9	
当期利益	93.2	80.0	85.7	-7.5	-8.1%
(%)	15.0%	12.9%	14.2%	-0.8	
総資産残高	3,455.3		3,434.5		
自己資本比率	89.4%		89.2%		
1株当たり当期利益	254.91円		235.12円		

8

第2四半期、上期のP/Lでございます。売上が602.7億円、前年に比べましてマイナス17億円の減収であります。前年比率でマイナス2.7%でございます。営業利益が115.3億円、営業利益率が19.1%、金額でマイナス4.9億円、前年比率でマイナス4.1%の減益となりました。税引前利益が120.9億円、当期利益が85.7億円という結果でございます。

総資産残高は後ほどB/Sでも説明申し上げますけれども、3,434.5億円です。自己資本比率が89.2%、1株当たり当期利益が235.12円という結果でございます。

(単位：億円)

■ 売上高	17.0 億円 減 (619.6 億円 → 602.7 億円)
	ヒロセ単体 : -21.8 億円 子会社 : +4.8 億円
■ 売上原価率	1.5 ポイント悪化 (55.6% → 57.1%)
	仕入原価費率 : 38.6% → 39.1 % 減価償却費率 : 8.2% → 10.1 %
■ 販売・管理費比率	± 0ポイント (25.0% → 25.0%)
	155.0 億円 → 150.7 億円 (4.3億円 減少)
■ 金融収益・費用	4.6 億円 悪化 (+10.1 億円 → +5.5 億円)
	為替差損益 : +5.1 億円 → -0.6 億円

9

主要な増減の要因になります。売上高が前年に比べまして17億円の減でありますけれども、単体側がマイナス21.8億円の減少で、子会社側はプラスで4.8億円であります。これは韓国向け等が好調というところで、子会社がプラスになっております。

それから、売上原価率は1.5ポイントの悪化でございます。仕入原価費率は0.5ポイントの悪化でありますけれども、大きい主要因としては減価償却費の率が1.9ポイントの悪化でございます。

それから、販管費の率は前期と変わらず25%で維持でございます。金額としては今期4.3億円の減少となりました。

最後に、金融収益・費用に関しましては4.6億円の悪化でございます。この主なところは為替が前期がプラス5.1億円だったのに対し、今期がマイナスの0.6億円になったといったところでございます。

2019年度 第2四半期 対前年同期 変動分析



(単位:億円)

	売上	営業利益	営業利益率	税前利益	税前利益率
2018年度 2Q実績	619.6	120.2	19.4%	130.4	21.0%
為替影響	-17.5	-4.7		-10.6	
減価償却費増		-10.6		-10.6	
人件費減		0.8		0.8	
物量増	0.5	0.1		0.1	
土地売却益		8.4		8.4	
その他		1.1		2.4	
変動額計	-17.0	-4.9		-9.5	
2019年度 2Q実績	602.7	115.3	19.1%	120.9	20.1%

10

続きまして、前年との変動の分析を進めたスライドでございます。為替の影響が売上でマイナス17.5億円、営業利益でマイナス4.7億円の影響。先ほどのとおりでございます。

減価償却費増が今期も続いており、営業利益に影響するところで、マイナス10.6億円です。これは先行投資を自動車、産機と、特に自動車向けで行ってきたところで、計画どおりでございます。

	2018年度 第2四半期	2019年度 第2四半期
為替レート：US\$	110.26円	108.63円
為替レート：€	129.85円	121.42円
為替レート：100ウォン	10.04円	9.22円



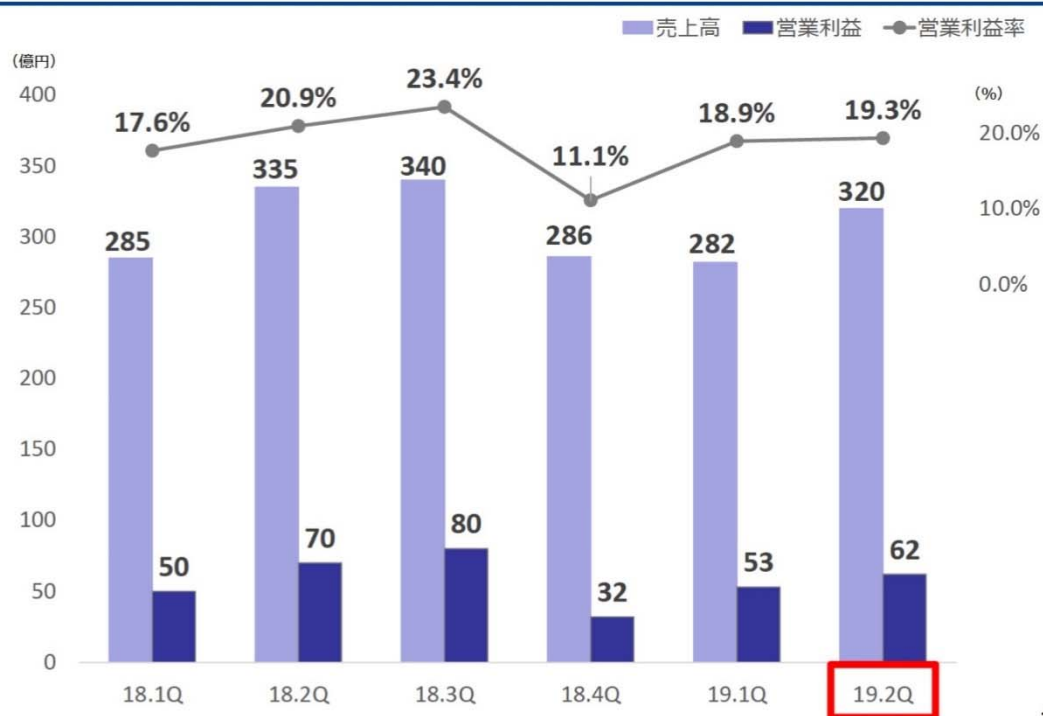
(単位：億円)

対前年同期為替影響額	
売上高	-17.5
営業利益	-4.7
税引前利益	-10.6

11

為替の影響だけを説明したスライドになります。ドル、ユーロ、ウォン、全て今期は円高に振れております。それで売上がマイナス 17.5 億円、営業利益マイナス 4.7 億円、税引前利益マイナス 10.6 億円の悪化になっているものがございます。ある意味、売上が為替の影響を除けば、昨年並みという結果でもあったことの裏返しでもございます。

2018年度1Q～2019年度2Q 四半期別 売上・利益推移



12

続きまして、売上と利益の四半期の推移でございます。第2クォーター、この四半期を抜き出しますと、売上が320億円、営業利益が62億円で、営業利益率は19.3%という結果でございました。1Qに対して良好な方向に進んでおります。

連結貸借対照表主要増減



(億円)

区分	科目	2019/3末	2019/9末	増減額	備考
資	現金及び現金同等物	523.2	551.0	27.8	3ヶ月超定期預金からの振替、他
	営業債権及びその他の債権	295.4	308.6	13.2	
	棚卸資産	139.4	138.5	-0.9	スマホ向けの在庫減
産	その他金融資産	1,728.8	1,676.4	-52.4	本社未収消費税還付△26.6億 社債△4.0億
	有形固定資産	627.4	631.8	4.4	
	使用权資産	—	46.0	46.0	IFRS16適用のためリース取引を 使用权資産として計上
	その他	100.0	82.2	-17.8	
合計		3,414.3	3,434.5	20.2	

現預金合計 1,727.6 1,703.9 -23.7

13

B/S になります。こちらは資産の部、総資産 3,434.5 億円、先ほどのとおりでございます。棚卸資産は若干ですけれども、スマホ向け売上好調というところで減少しております。

それから、第1クォーターでも説明を申し上げましたけれども、本年度より IFRS16 号の適用、いわゆるリース会計の適用により、使用权が資産に計上されて 46 億円がございます。

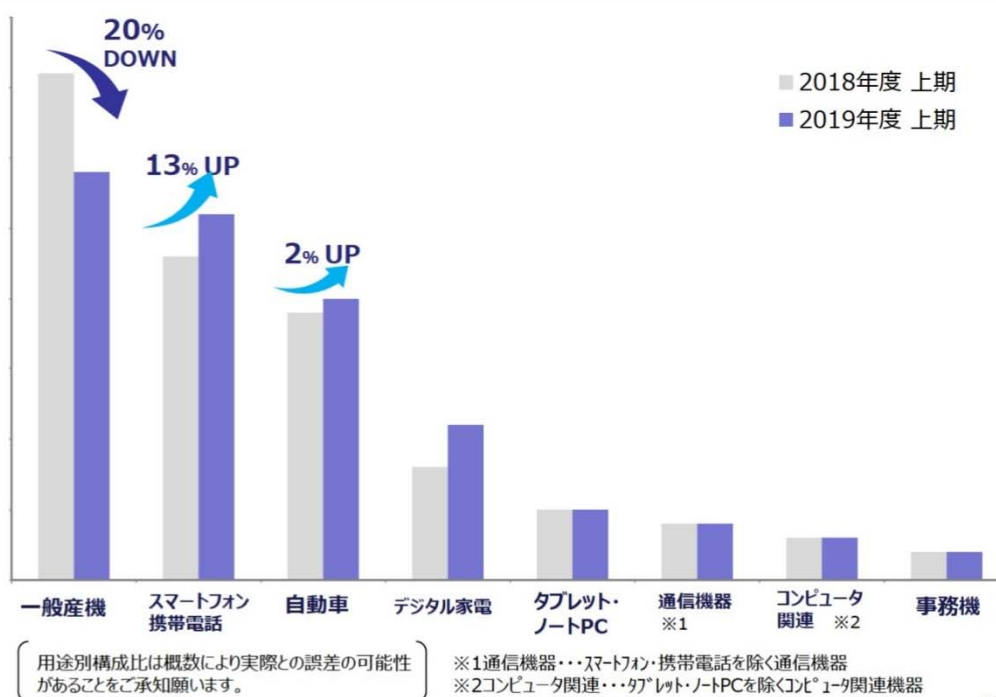
連結貸借対照表主要増減

(億円)					
区分	科目	2019/3末	2019/9末	増減額	備考
負	支払債務及び その他の債務	193.1	168.1	-25.0	
	リース負債	—	46.0	46.0	IFRS16適用によるリース負債を 計上
債	未払法人税	30.9	35.6	4.7	
	その他	117.1	121.4	4.3	
		341.0	371.2	30.2	
純	資本金及び 資本剰余金	207.2	207.1	-0.1	
	利益剰余金	3,033.5	3,060.7	27.2	当期利益 85.7 億円 - 配当 43.8 億円 - 自己株消却 14.9
資	自己株式	-232.1	-217.3	14.8	自己株式消却 +14.9
	その他	64.8	12.8	-52.0	為替換算調整勘定 -59.3
産	合計	3,073.3	3,063.3	-10.0	
	負債及び純資産合計	3,414.3	3,434.5	20.2	

14

負債と純資産の部です。同様にこの負債のほうでも、リース会計のところでは負債で 46.0 億円計上しております。

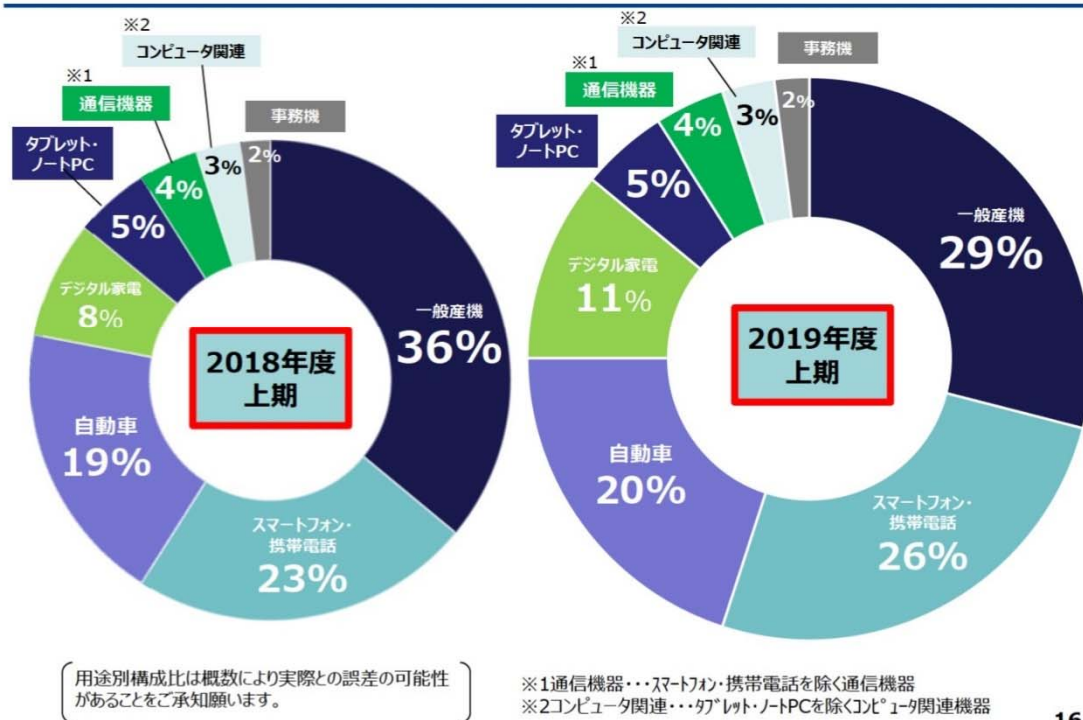
コネクタ用途別売上 前年比較（概数）【連結ベース】



15

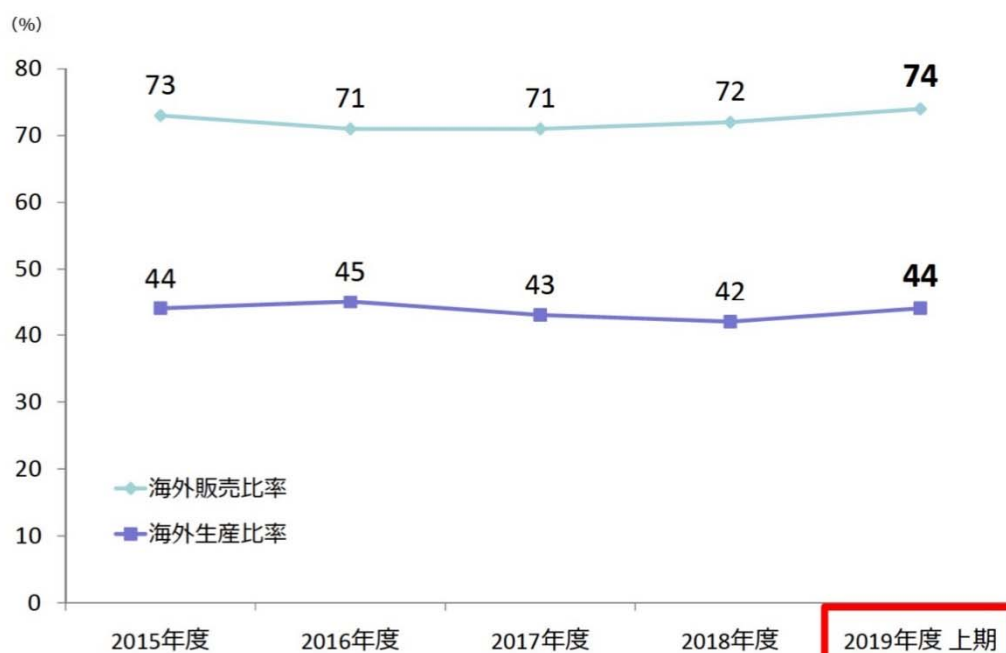
続きまして、分野別、先ほどの3分野からもう少し細かくしたところがございます。一般産機向け、前年に比べてマイナス20%、これは先ほどの説明のとおりでございます。スマートフォン・携帯電話がプラス13%のアップ、自動車が2%のアップでございます。デジタル家電、これは数字は出ておりませんが、昨年と比べて伸びが出ております。こちらはウェアラブル関係のもの、それからAIスピーカーといった、どちらかというところの新規商品のところの取り込みで増えているところがございます。

コネクタ用途別売上構成比（概数）【連結ベース】



分野別を構成比にしたものになります。昨年に比べまして一般産機が今はちょっと低調で、構成比が29%に、昨年の36%から下がってきております。スマートフォン・携帯電話向けは昨年の23%から26%に構成比が上がってきております。自動車はほぼ横ばい、構成比では20%という結果でございます。

海外生産比率・海外販売比率 推移



17

こちらは海外比率になります。上の折れ線が海外販売比率、下の折れ線が海外生産比率でございます。昨年度の年計に対して、この上期は2ポイントずつ上がっております。海外販売比率が74%、海外生産比率が44%に上がってきております。これは今期スマートフォン向けが比較的好調だということ、一般産機向けが下がっているといったところの影響でございます。生産比率が上がっているのは、スマートフォン向けの韓国の生産を増やしている要因であります。

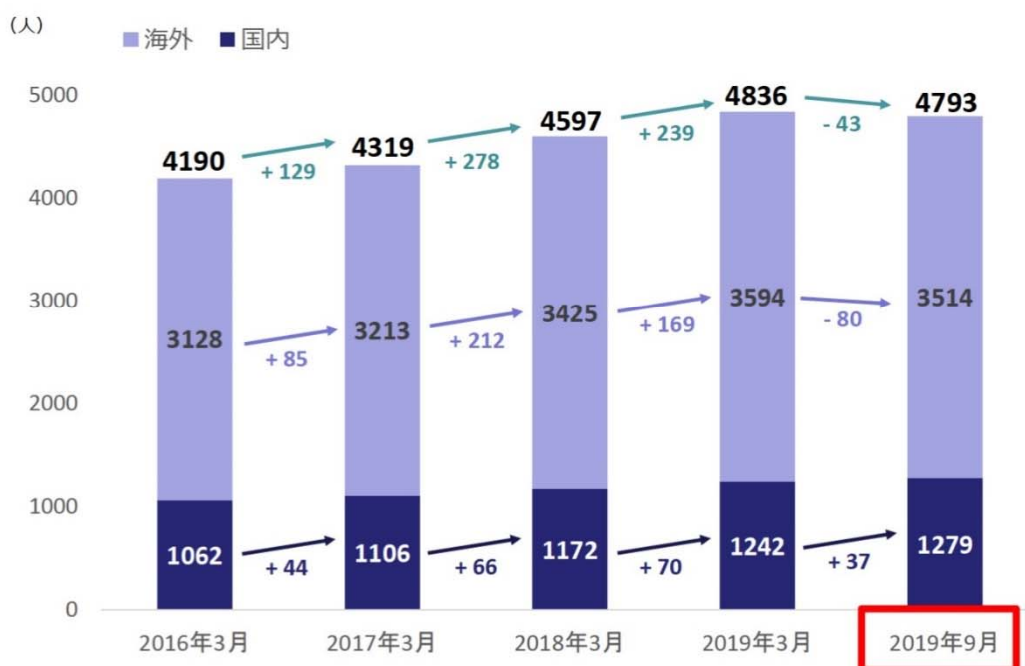
設備投資・償却費 推移（連結ベース）



18

設備投資と償却費の推移です。上期の設備投資 88 億円、償却費が 69 億円の結果でございます。

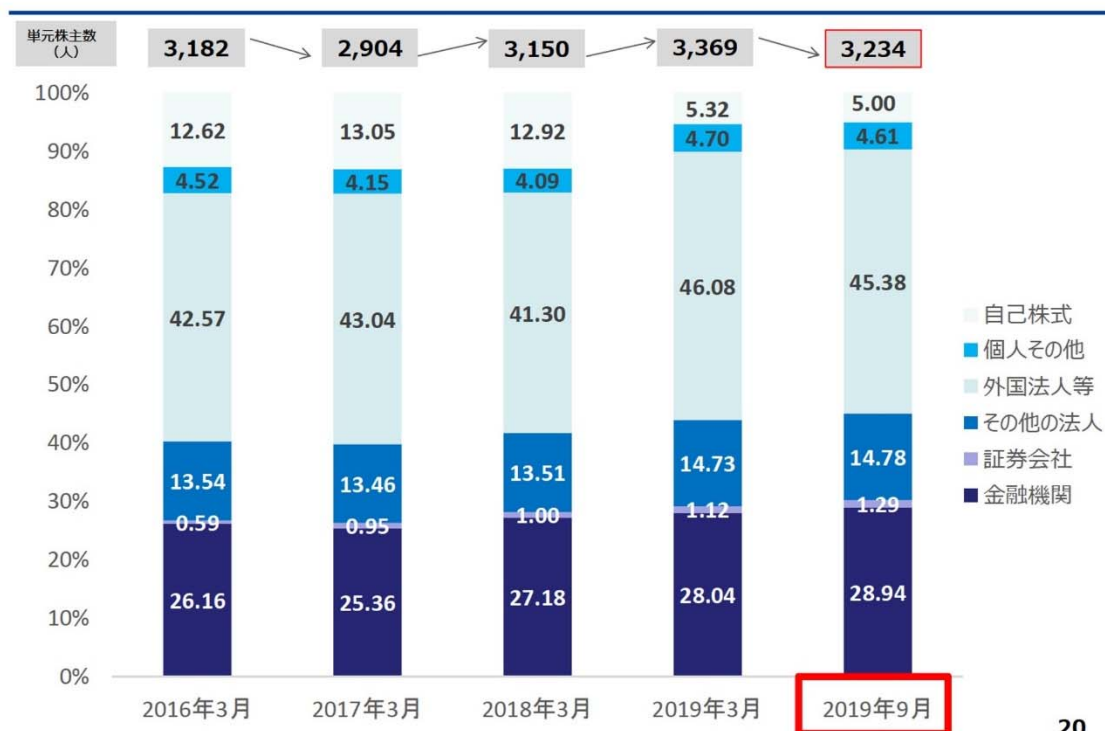
年間の予想でありますけれども、設備投資 175 億円、償却費 140 億円は変更はございません。



19

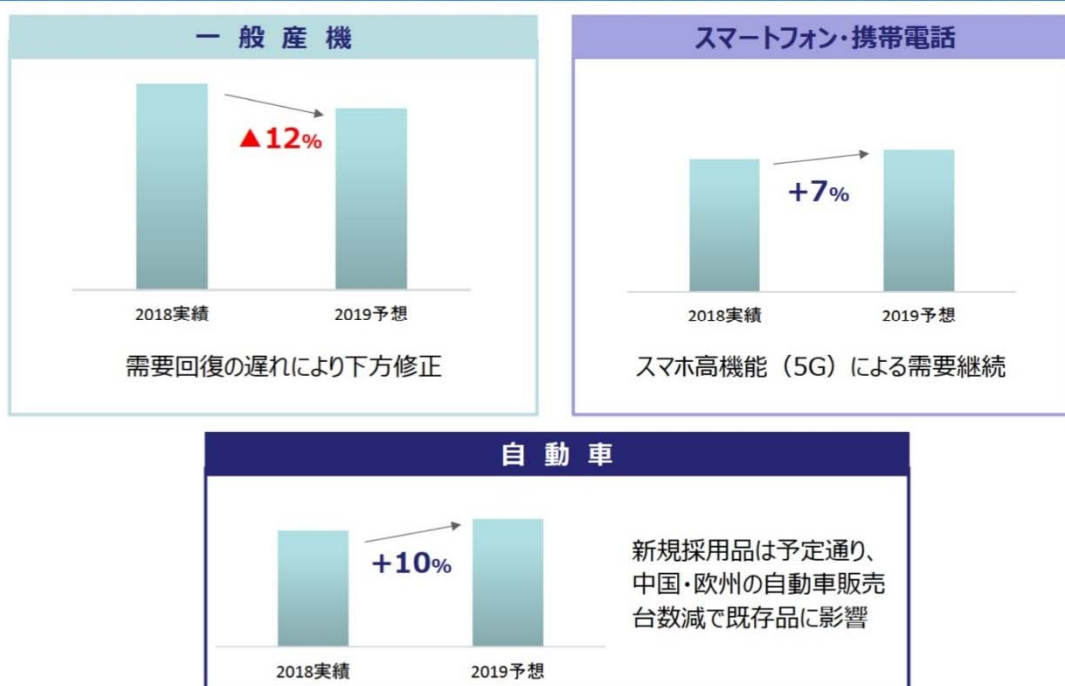
従業員数の推移でございます。トータル的人数、3月末から9月の末にかけて若干43名ほどマイナスになっておりまして、4,793名です。内訳としましては海外の人数が減っておりますけれども、こちらはマレーシア、インドネシア、中国の工場が若干数、生産見合いで減っているといったところでございます。

株主分布推移



株主の分布でございます。外国法人等が45.38%で、3月末よりもポイント数は若干減っていますが、やはりここが一番大きいということです。自己株式、こちらは自己株の消去をしておりますので、5.00%に下がっております。単元株主数は3,234名と、若干の減少でございます。

2019年度 分野別 動向（予想アップデート）



21

ここから年間の予想になります。一般産機向け、スマートフォン・携帯電話向け、自動車向けの伸び率の予想アップデートになります。一般産機向け、年初の予想ではマイナス3%と申しあげましたけれども、マイナス12%に下方修正しております。回復の遅れによるものです。イメージしているのは、年度末ぐらいから回復するという予定で計画は持っております。

それから、スマートフォン・携帯電話向けに関しましては、プラマイ0%の年初予想でしたけれども、ここはプラス7%に修正をしております。スマホ高機能、いわゆる5Gの需要が予想よりも早く立ち上がりを見せているといったところ。それから、中国・韓国等が私どもの想定よりもやや好調だといった背景でございます。

それから、自動車向けは年初はプラス18%で申し上げておりましたけれども、ここをプラス10%に変更しております。純増させる新規採用品は予定どおり進んでおりますけれども、中国・欧米等の自動車販売の台数減が既存品のところに影響しておりますので、全体を下げています。これから増やしていくところに関しては、予定どおり進めておりますので、年間では2桁の伸びは確保できるかと考えております。

2020年3月期 業績予想（連結）【IFRS】

産機・自動車向けビジネスが当初予想を下回る見込みのため、
2019.5の公表値を修正致します。

(金額単位:億円)

	2018年度(2019年3月期) 実績		2019年度(2020年3月期)			第2四半期累計 対前年実績		通期 対前年実績	
	第2四半期累計	通期	第2四半期累計 実績	2019.5 公表値	通期 予想	増減額	増減率	増減額	増減率
売上高	619.6	1,245.9	602.7	1,300.0	1,250.0	-17.0	-2.7%	+0.4	+0.3%
売上原価率	55.6%	56.1%	57.1%	56.9%	58.2%				
営業利益	120.2	231.6	115.3	250.0	220.0	-4.9	-4.1%	-11.6	-5.0%
(%)	19.4%	18.6%	19.1%	19.2%	17.6%				
税前利益	130.4	246.7	120.9	260.0	230.0	-9.5	-7.3%	-16.7	-6.8%
(%)	21.0%	19.8%	20.1%	20.0%	18.4%				
当期利益	93.3	178.9	85.7	185.0	175.0	-7.5	-8.1%	-0.4	-2.2%
(%)	15.0%	14.4%	14.2%	14.2%	14.0%				
一株当り当期利益	—	489.46円	—	507.37円	479.94円				
一株当り配当	120円	240円	120円	240円	240円				
連結配当性向	—	49.0%	—	47.3%	50.0%				
						為替レート	2018年度 実績	2019年度 2Q実績	2019年度 予想
						1US\$	110.26円	108.63円	108.50円
						1€	129.85円	121.42円	120.60円
						100won	10.04円	9.22円	9.24円

22

そして、そのまとめで業績予想になります。ここから福本の説明になります。

福本：おはようございます。管理本部の福本です。

この1ページだけを説明するのもあまりうれしい話ではないのですが、既に先週金曜日に業績予想の修正に関するお知らせを出させていただいております。この表、真ん中の辺に2019年5月の公表値を入れておりますけれども、残念ながら売上は1,300億円に対しまして1,250億円。先ほど須崎から説明がありましたとおり、スマートフォンのほうは予想よりも微増という感じですが、一般産機、それと自動車が4月、5月に見ていたのよりも落ちるということで、約50億円、公表値、売上は下げさせていただきます。

それに付随いたしまして営業利益、これが250.0億円に対しまして220.0億円でございます。利益率が17.6%で、以前の公表値に対して営業利益は30億円減少、下方修正させていただいております。

税前利益が同じように30億円、それと当期利益175.0億円ということで、公表値に対しまして10億円減という形で、残念ながら今回は出させていただいております。

為替レートはここに書いてあるとおりでございます、19年度の予想、1ドル108.50円、ユーロ120.60円、100ウォン当たり9.24円ということで出させていただきます。

年間の配当は今回は修正をいたしませんで、240円。配当性向は50%ということで進めていきたいと考えております。

まだ読み切れないところもいろいろありますが、少なくともこの数字をきちりやっていきたいと考えております。

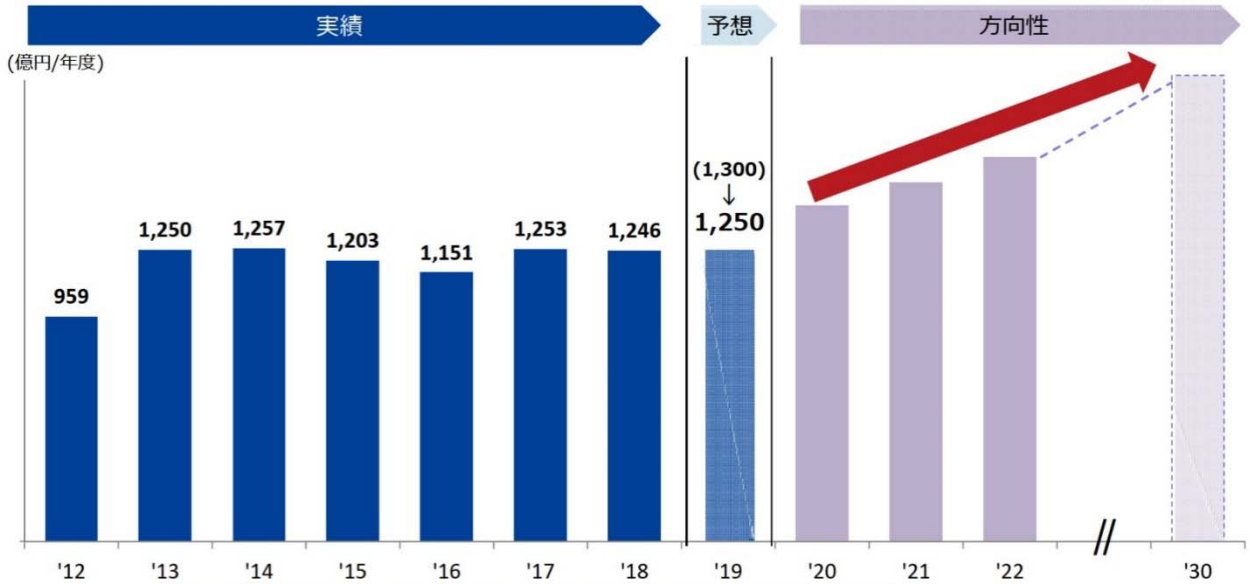
私のほうは簡単ですが、以上でございます。

須崎：続きまして、2019中長期成長戦略の進捗についてと題しまして、社長の石井より説明申し上げます。

石井：おはようございます。あらためまして、ヒロセ電機の石井でございます。本日はご多用のところ多数ご参集いただきまして、ありがとうございます。

私から成長戦略について、ご報告をさせていただきたいと思っております。大きな方向性としては、ほとんど変更なしという状況でございます。ですから、今回は少し補正をする、強化するポイントを中心にご報告させていただければと思っております。よろしく願いいたします。

高収益経営を維持し、中長期的に力強い成長



2018~2019年度 結果、見通し：“後退”
 2020年度 以降を起点に 回復させる（再チャレンジ）

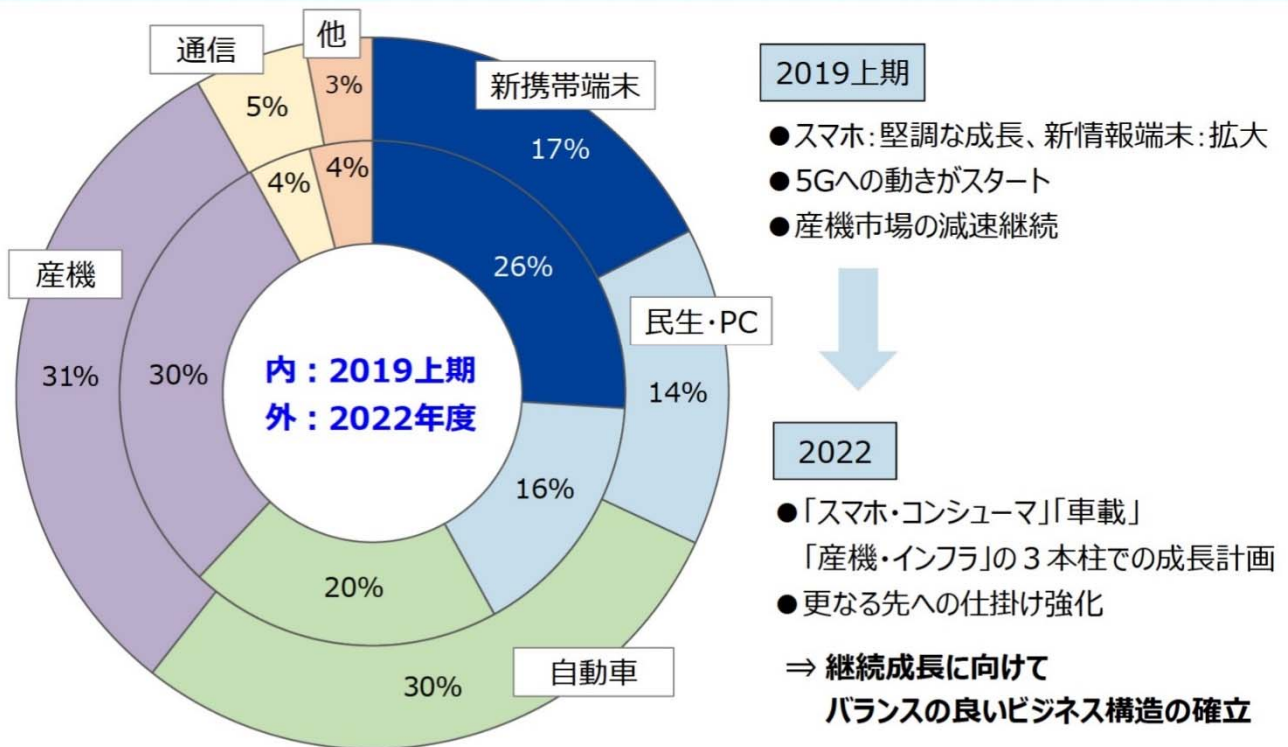
⇒ 1年スリップ

3

これはいつも見ていただいているバーチャートでございます。今、福本と須崎から説明をさせていただいた数値のとおりでございます。誠に申し訳ないですが、今期の見通しは全くふがいない状況でございます。1,300 億円の売上公表値を 1,250 億円に修正をせざるを得ない状況でございます。

前回、この場で 2019 年を基点に回復を図るということで、皆さんに計画を説明させていただいたわけでございますけれども、残念ながら今回の計画修正で 1 年スリップをせざるを得ないような状況でございます。2020 年、来年度を基点にして、間違いなく成長路線に描けるように、この下期以降、現状それから計画のところをしっかりと確認をして、来期以降に臨みたいと思っております。

中期分野構成比イメージ〈再掲〉



4

これもいつものパイチャートでございますけども、全体の売上に対する分野別の構成率の最新のパイチャートでございます。2019年の上期を総括をすると、三つかなと思います。スマホが予想以上に堅調でありました。第1クォーターのところは相当苦戦はしておりましたけども、2クォーター以降のところは予想以上の堅調な数値をたたき出したということは言えます。

プラス、新情報端末と分類をしておりますけども、ウェアラブルデバイス、AIスピーカー、スマートウォッチ、スマートグラス、この辺のところはプラス、新しいアプリケーションではワイヤレスイヤホン等も相当活況が続いているということで、この新情報端末の拡大のところは下期以降、来期に向けて相当期待していいのかなというか、ここをしっかりとキャッチングしないとイケないということだと思います。

それから、これは業績にはまだリンクはしていませんけども、5Gの関係がスタートしております。

三つ目が、やはり産機市場の予測以上の減速でございます。前年度比で比較をすると20%ダウンということをお先ほど報告をしたわけでございます。私どもの中期的なプランとしては、少なくとも産機向け、20%までは行きませんが、前年度比でいけば10%ぐらいのところは十分いけるだろ

うと。このプラマイのギャップが30%生じることによって、この上期の結果に至ると思っております。

それから、2022年にかけてのパイチャートに関しては、前回の比率と同じでございます。私どもはいつも言っていることですが、3本柱、中期の成長路線は私どもは3本柱という捉え方をしているわけですが、ここにさらなる仕掛けの強化ということが2020年度のポイントになってくるかなと。いずれにしても、中期的にはバランスの良いビジネス構造から継続安定成長を狙うという路線に変更はなしでございます。

10月12～13日 台風19号による郡山ヒロセの被害 影響に関して

10/13～14 初期状況



復旧後 (10/24撮影)



エレベータ故障にて
昇降機を仮設

- 10/13 阿武隈川の氾濫により郡山工場 1階部分が浸水。
- 10/14 水が引き、被害状況把握と一部復旧作業開始。
- 10/16 復旧業務を本格化。
- 10/21 殆どの品目の生産・出荷に対応。

- 従業員自宅被害や協力会社へのケア
- 被害(軽微)から完全復旧へ
- 将来の気候変動リスク対策を強化

5

こちらのスライドから近況のご報告をせざるを得ない状況が一つ出てきております。10月の大型台風による郡山工場の被災でございます。初期ステージの被災の状況がこんな状況（左上）にございましたけども、復旧後の10日後にはだいぶ整理をされてきておりまして、今週から完全に復旧の目処を立てている。先週の段階ではエレベーター関係の故障が一番クリティカルな状況だったわけですが、このような仮設の昇降機を使って物の移動等もやっております。

報告は、随時ホームページで掲載をさせていただいておりますけども、お客さんへの被害自体は軽微という捉え方でよろしいかと思いますが、従業員等の何人かの方は被災をされている状況で、この辺のケアをしっかりしていくということです。

それからこの異常気象が異常ではないという捉え方での取り組みも必要ということで、こちらには気候変動のリスク対応ということも、下期以降捉えていかないといけないポイントだと思っております。取り急ぎご報告のみさせていただきます。

いろいろな方々から被災のお見舞い、それから励ましのお言葉をいただいております。この場をお借りして御礼申し上げます。



ヒロセ技術展〈CONNECTION 2019〉



〔東京〕東京プリンスホテル 10月17日（木）～18日（金）
〔大阪〕グランキューブ大阪 11月28日（木）～29日（金）にて開催

写真は東京会場
4,130名のご来場

**皆様のお声を、未来プロダクトに展開してまいります。
引き続きのご支援・ご協力 よろしくお願い申し上げます。**

6

それから、先月、ヒロセ技術展の開催をいたしました。10月17日、18日で、東京プリンスで2日間行いました。予想を超える盛況な状況でございます。人数的にはエンジニアさんを中心に4,100名を超える方に来場いただいたわけですが、来場者の数がうんぬんではなくて、お客さんから聞こえてくる声、評価が非常に好反応なものが多々ございます。

11月は大阪で、同じようにこの展示会を開催いたします。二つ併せてでの展開になりますけども、よりお客さんの声を自分たちの次なるプロダクトに展開を急ぎたいと思っております。



『変化・成長：3本柱』へ『①～④ Key Tech + “解析・分析力”』⇒ 分野横断・差異化提案力強化

7

これはいつもの中期の分野戦略イメージということで、使わせていただいているスライドでございます。大きな変更はありませんけども、多少やっぱりヒロセの戦い方を少し変化をさせているというか、変遷が出ているというところのご紹介をいたします。

3本柱のところは変化・成長という捉え方からコンシューマ、産機、自動車というのは、これは中期的に、長期的にも変わりはありません。それから、ここの市場への四つのキーテクノロジーですね。高速、高周波、ハイパワー、小型・ダウンサイジングという四つを私どものキーテクノロジーということで捉えているわけですが、このトレンドはさらに分野を横断して、共通化してきているような状況でございます。

例えば自動車、皆さんご存じのように非常にコンシューマ化のトレンドが動いております。従って、自動車のアプリケーションに対応するものの小型化だとか、高速だとかいうような展開が必要になるテクノロジーが多くの場面で出てきております。同じようにコンシューマ系は5Gを中心にするように、高速、高周波という流れが出てきているように思います。

私どもは従来、この3本柱に対して、しっかりこの四つのキーテクノロジーをキャッチングして、成長路線を描くことが今までの報告だったわけですが、さらにここを手元で手を打

っているのは、皆さんご存じのように、横浜センターの EMC 室です。これは一昨年の 4 月にスタートしております。電波暗室とシールドルーム、こちらが非常に活況に今なっております。

プラス、右サイドを見ていただくと、昨年の 4 月に一関の新試験センターがスタートしております。私ども、試験のキャパシティを、2 倍近くになっていると思います。リードタイムも従来のテストリードタイムから 50%削減をするような、パフォーマンスが出てきております。

従って、3 本柱に対して四つのキーテクノロジーをキャッチングして、さらに解析、分析力、ここがヒロセの強みとして加わり、私どもがさらに強みとして、分野横断、それから差別化の提案力強化に今、向かっているということのご報告をさせていただきます。



2019年度 総括〈再掲〉

➤ 『G-WING(中計)』達成へパワーUP、結果を出す

- 〈1〉モノづくり力
 - 〈2〉技術開発力
 - 〈3〉Global対応力・現地力
- } “進化”

◀ + ▶

『“大変化の市場環境” ← 3本柱の展開遅れ、土台構築中』

実行力の加速

➤ 手元と中・長期の二軸での対策を急ぐ！

8

これが最後のスライドでございます。取り組みはここ 1~2 年変わりはありません。モノづくり力、技術開発力、Global の対応力、この三つを強化、進化すべきポイントということで動いているわけでございますけれども。現状はどうかというと、非常に大きな変化が、市場の変化が起きております。それに対してヒロセの現状の認識としては、3 本柱の展開とはっておりますけれども、ここの遅れが目立ちます。ただし、今、相当のスピード感で土台の構築はされつつあるという認識をしております。

それでは、下期以降何をするかという、方向付けはほぼ間違っていないであろうと認識しており、さらに実行力を加速することが非常に大きな課題だと思っております。いずれにしても、手元と中・長期、二軸で対策を急ぐのが、下期以降の展開かと思っております。

簡単ではありますが、進捗のご報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

免責事項

本資料には、ヒロセ電機の現時点における予測に基づく記述が含まれています。

これら将来に関する記述は、既知または未知のリスク及び不確実性その他の要因が内在しており、当社における実際の業績と異なる恐れがあります。ご承知おき下さい。